ウィリアム・フォークナー作 *Flags in a Dust* 研究

——フォークナー作品に見られる「ダブル」

松ノ井　真木子

序

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の作品を読んでいて興味深いのは，舞台となっている南部特有の性質に基づく，登場人物達の「ダブル」の関係である。これは *Flags in the Dust* の中に数多く発見されたが，もちろんフォークナーの他の作品にも当てはめて言えることである。サートリス家 (Sartoris) の数世代の軌跡を綴った物語である *Flags in the Dust* (1973)[1] には，多くの人物が登場する。今回は，どういう人物同士がどういう「ダブル」の関係に置かれているかということの理解から作品を読み直していくことにする。

文学作品で「ダブル」という場合，それは実に様々な形態を持つため，定義するのは難しい。しかしあえて大雑把に分類するとすれば，以下のようになるのではないだろうか。

1．「類似的ダブル」
2．「対極的ダブル」
3．「観念的存在のダブル」

Flags in the Dust の登場人物達の間には，実に多くの「ダブル」が見受けられる。入り組んだ物語展開，人間関係を整理していくうえでも，「ダブル」の観点から作品を分析していくことは必要な作業であろう。では，以上のような「ダブル」の三つの形態を整理しながら，*Flags in the Dust* を「ダブル」のそれぞれの形態ごとに考察していこう。

1．「類似的ダブル」

「類似的ダブル」は，二人の登場人物が，あたかも双子のように，性質や運命などにおいて極めて類似している状態を「類似的ダブル」と分類する

ことにする。「類似的ダブル」が顕著に見られる例を挙げるとすれば，エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) の「ウィリアム・ウィルスン」('William Wilson') における二人のウィリアム・ウィルスンがそれである[2]。語り手であるウィリアム・ウィルスンは，学校で自分と同名の友人に出会う。彼らは不思議なことに同じ年の同じ日に生まれ，同じ学校に同じ日に入学し，背格好や目鼻立ちはそっくりであり，まるで木霊のように話し方まで似かよっているのである。

Flags in the Dust において，「ウィリアム・ウィルスン」における二人のウィリアム・ウィルスンのような「類似的ダブル」の関係にある者としてまず挙げられるのが，ベヤード・サートリス (Bayard Sartoris, young Bayard) と彼の双子の兄弟ジョン・サートリス (John Sartoris (II)) であることは言うまでもない。彼らは南部豪族サートリス家の末裔として，その血なまぐさい運命に巻き込まれていくのである。物語中の現時点では，ジョンは既に戦死してしまっているが，彼はベヤードの心の中に今も息づいているのである。そしてジョンが黄泉の国からベヤードの心を操るかのごとく，ベヤードは飛行機事故というジョンと全く同じ形で最後を迎えるのである。

しかし，この作品における「類似的ダブル」で，最も注目すべきは，それぞれの人物につけられた名前の持つ支配力である。この作品には，代々同じファースト・ネームを持つ者が幾組か登場する。欧米社会では，家族や親族で同じファースト・ネームをつけるという習慣は，全く珍しいことではないのは言うまでもないことだ。しかし，この作品の中では，同じファースト・ネームを共有するということに，特別な意図があるように思われる。名前の持つ力に引き込まれていくかのように，もしくはその名を名付けられることによって誕生の時から運命が定められていたかのように，同名の者同士が同じ様な運命に支配されていくのである。

現サートリス家の領主である老ベヤード (Bayard Sartoris, old Bayard) と，先に少し触れた若ベヤードの関係に注目してみよう。この両者には時代に取り残された精神的な空虚感，暴力的な死などの共通点が見られるため，「類似的ダブル」の関係にあると見て良いだろう。彼らは，戦争で英雄になりそこなった人物であるという点，或いは，それによる精神的な負い目を感じ続け，刻々と進んでゆく時代の中でしっかり前を見据えて歩んで行けないという点で一致している。そして両者とも，近代的産業の産んだ

乗り物で最期を遂げるという運命をたどるのである。

同名の名前を持つ者同士の「類似的ダブル」の関係は「ベヤード」という名を持つ二人だけではない。「ジョン」(John Sartoris) という名の支配下にある二人の人物，即ち，先代のジョンと，孫ベヤードの双子のジョンを挙げて考えてみよう。彼らは共に，戦争に命を捧げた英雄である。そして亡くなった今となっても，残されたサートリス家の者の心に生き続けているという点でも共通している。ジョン達の勇姿の光の陰に，ベヤード達はそれぞれ隠れ込んでしまうのである。物語の結末で，ナーシッサ (Narcissa Benbow) が産んだ若ベヤードの息子を，先代ジョンの妹ミス・ジェニー (Miss Jenny, Virginia Du Pre) は勝手に「ジョン」と呼び，更に彼女はこの赤ん坊を代々のジョン達と混同してしまい，その勇姿を重ね合わせるのである。このように，「ベヤード」にしても「ジョン」にしても，その名の与える大きな影響によって，同じ名を持つそれぞれの者同士は「類似のダブル」の関係にあると言える。

名前の支配力について最後に少し補足しておきたい。ナーシッサは，ミス・ジェニーがジョンと呼んでいた自分の子供を，結局自分のベンボウ家の名をとって，ベンボウ・サートリス (Benbow Sartoris) と名付ける。明らかにこれは，名前による支配力を意識して，暴力的なサートリス家の名前をあえて避けようというナーシッサの気持ちのあれわれである。赤ん坊は，ベヤードが試作飛行機のテスト飛行中の事故で亡くなったちょうどその日に誕生する(3)。この赤ん坊が今後どのような人生を歩んでいくかはこの作品の中には描かれていないので，この子がベンボウ家の者と「類似的ダブル」の関係か否かは作品中からは判断できない。

2. 「対極的ダブル」

「対極的ダブル」は，「類似的ダブル」とは逆に，性質などが全く対極的である二人の登場人物を指すものとする。ロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94) の『ジキル博士とハイド氏』(*A Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*) が言わずとも知れたよい例である(4)。(Mr. Hyde) は，ジキル博士 (Dr. Jekyll) が自ら調合した化学薬品を服用することで表れるもう一つの人格である。ジキル博士は品行方正で人々から尊敬される医者であり，いわば善の塊であるが，一方ハイド氏は

彼とは全く正反対の性質を持ち，いわば悪の権化である。したがって，この両者は「対極的ダブル」の関係にあると言える。

Flags in the Dust において「対極的ダブル」の関係にある者は，サートリス家の黒人召使いと主人，若ベヤードとナーシッサ，或いは老ベヤードと若ベヤードなど，挙げていけばきりがない。その中で，作品鑑賞の際最も注目すべきは，やはりサートリス家の人間とベンボウ家の人間の「対極的ダブル」ではないだろうか。そこで，若ベヤードと，ナーシッサの兄ホウレス・ベンボウ (Horace Benbow) に焦点を当てて考察してみよう。

この両者は，第一次大戦に参加し，その経験による虚無的な精神状態から，いまだに抜け出せないままであるという点で一致しているが，帰還後の身の置き方に，彼らの対極性を見ることができる。ホウレスは定職に就き，今は静かな生活を送っている。かたや，若ベヤードの方は，定職に就かず，家にさえ腰を落ち着かせることができず，自虐的で暴力的な生活を送っている。いわば，ホウレスが「止」であれば若ベヤードは「動」であり，「静」であれば「激」である。そしてこの両者は，ナーシッサをめぐっても対極的な位置に立っていると言える。ナーシッサは若ベヤードと結ばれるが，その一方で，ホウレスとの関わりにおいても，出征から帰ってきたホウレスの膝にテーブルの下から触れる(5) など，兄妹を超えた愛情を思わせるのである。

この「対極的ダブル」にある二人を結びつける役割を担うのが，ナーシッサであり，またナーシッサと若ベヤードの子供であるホウレス・ベンボウだ。ナーシッサはサートリス家に嫁ぐことにより，「激」という言葉の似合うサートリス家に「静」をもたらす。それらの中和として生まれてきたのがホウレス・ベンボウである。この両家名を併せたベンボウ・サートリスという名がそれを象徴している。全く対極的ともいえる性質が中和されたこの赤ん坊の誕生は，血にまみれたサートリス家の古い時代が終結し，また新たな一族がここから始まるのではないかという希望を与えてくれる。

3．「観念的存在のダブル」

一人の登場人物の中に別の人物が観念として存在する場合，「観念的存在のダブル」と呼ぶこととする。例えば，フランシス・スコット・フィツジェラルド (Francis Scott Fitzgerald, 1896-1940) の『偉大なるギャッツビー』

(*The Great Gatsby*) のニック (Nick Carraway) とギャッツビー (Jay Gatsby) がその顕著な例である[6]。語り手ニックは，常にギャッツビーを意識し，次第にギャッツビーの存在がニックの精神を大きく支配する。つまり，ニックの観念の中には常にギャッツビーが存在しているのである。尚，広い意味で，一人称小説のほとんどに，この「観念的存在のダブル」が見受けられると言えよう。一人称小説では，「語り」を通して常に語り手である者の観念の中に，別の人物が存在しているからである。

Flags in the Dust にみられる「観念的存在のダブル」の関係を引き起こす者のうち，最も際立った存在は初代ジョン・サートリス大佐であろう。この物語は，フォールス老人 (old man Falls) と老ベヤードに語られる，故ジョン・サートリスの回想から幕を開ける[7]ため，作品全体に投げかける故ジョンのインパクトは強い。彼は登場人物達の回想の中にしか登場しない。しかし彼らの心の中から片時も忘れ去られることはなく，いわば彼らの観念にとりついていると言える。サートリス大佐は亡くなった今でさえ，フォールズ老人の「観念的存在のダブル」であり続けている。

同じように，先代のジョン・サートリスは，使用人サイモン (Simon) の「観念的存在のダブル」である。サイモンは近頃独り言が多くなっているが，それは常に今は亡きジョン・サートリスに向かって話しかけているものである。サイモンの観念の中にもジョンの存在は取り憑いているのである。

一章のところで，若ベヤードと双子のジョンのダブルについて述べたとおり，彼らは「類似的ダブル」である。しかしそれと同時に，「観念的存在のダブル」でもある。若ベヤードが戦争からの帰還後，暴力的かつ自虐的な生活を送っているのも，ひとえに，常に彼の中には観念としてのジョンの存在があるからである。ジョンが飛行機事故で死んでいくのをすぐそばで見ていながら，ベヤードは彼の命を救う手助けを何一つしてやれなかった。そしてジョンは戦死した英雄となったが，ベヤードは生き残り，日陰の道を歩まねばならない。こうしてジョンの死がベヤードの精神的外傷となって，ジョンのことを忘れることができなくなった。最終的には，ジョンがベヤードの観念の中から彼を操るかのように，ジョンと同じ飛行機事故によってベヤードは自殺とも思える最後をむかえることになるのである。

今挙げた三つの例から言えるのは，フォールズ老人，サイモン，若ベヤードの「観念的存在のダブル」となっているジョン達は，死によって影響力

を強め，それによって，残された彼らは生活の中でこの「観念的存在のダブル」を常に追い求めていくことになるということである。

結

以上のような「ダブル」の三つの分類は，あくまでも非常に大まかなものであり，実際はもっと様々な「ダブル」の形態がある。また，上記三つの分類の間にも共通する部分は多くある。例えば，ポーの「ウィリアム・ウィルスン」をもう一度例に挙げて考えてみると，二人のウィリアム・ウィルスンは先に述べた様に「類似的ダブル」のタイプであるが，それと同時に，他の二つのダブルのタイプにもあてはまる。

語り手の方のウィリアム・ウィルスンは背徳的な人物であるが，何か悪事を働こうとするたびにもう一人のウィリアム・ウィルスンが現れて邪魔するのである。後者は，前者の持ち合わせていない，もしくは忘れかけている，良心の象徴と言えよう。この様な観点から見た場合，この両者は「対極的ダブル」の関係にあると言える。更に，この小説は語り手のウィリアム・ウィルスンの一人称小説である。彼は常にもう一人のウィリアム・ウィルスンを意識し，精神的に支配されている。前者の中には後者が観念として存在し続けているのである。従ってこの両者は「観念的存在のダブル」の関係にもあるのである。

このことは勿論，*Flags in the Dust* における「ダブル」についても言えることである。若ベヤードと双子のジョンの関係は，「類似的ダブル」であり，「観念的存在のダブル」でもある。若ベヤードと老ベヤードの関係は，名前の持つ支配力の点から見れば「類似的ダブル」であるが，前者が自動車という近代性に象徴される一方で，後者はそれを嫌いそれによって命を落とすという「対極的ダブル」でもある。同じことが他の人物達にもあてはめられる。

Flags in the Dust における三つのダブルの形態のうち，最上位にくるものを挙げるとするなら，「対極的ダブル」であろう。この作品には，対極的な関係におかれている者が実に数多く登場するからである。いやむしろ，この作品，ひいては他のフォークナー作品全てが，そもそもアメリカ南部に特徴的に見受けられる対極性に基づいて描かれていると言った方が適切であるかもしれない。つまり，作品の背景に，アメリカの南部と北部，黒

人と白人，男と女，保守的なものと革新的なもの，などの対立するものが常にあるのである。登場人物達は，これらを常に生活の中に有するのである。そしてこうした南部特有の対極性が，フォークナー作品におけるダブルの原点と言えよう。

注

(1) フォークナーの三作目の長編小説。1927年脱稿。しかし出版社から不評で，なかなか出版に到らず，大々的な削除と修正をした後，『サートリス』(Sartoris) という題名に変えてやっと日の目を見る機会を与えられた。その後，*Flags in a Dust* の名で1973年に覆刻された。今回使用したのは，この復刻版。

(2) See, Edgar Allan Poe, 'William Wilson', *Tales of Grotesque and Arabesque*, 1839.

(3) Faulkner, *Flags*, pp. 419-422.

(4) See, Robert Louis Stevenson, *A Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886.

(5) Faulkner, *Flags in a Dust*, p. 183.

(6) See, Francis Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, 1925.

(7) Faulkner, *Flags*, p. 3.　この箇所は，Sartoris として出版される時に大幅に削除されている。

〈使用テキスト〉

・Faulkner, William. *Flags in a Dust*, Random House, 1974.

〈参考図書〉

・Faulkner, William. *Sartoris*, Harcourt, Brace & Company, 1929.

・Brooks, Cleanth. *William Faulkner, The Yoknapataupha Country and Beyond*, Yale University Press, 1963.

・Everett, Walker K. *Faulkner's Art and Characters*, Barron's Educational Series, 1969.

・Taylor, Walter. *Faulkner's Search for a South*, University of Illinois Press, 1978.

・大橋健三郎著，『ウィリアム・フォークナー研究』，南雲堂，1996年。